再びその人らしい生活に
ふれあいひろば
2019年 冬号 Vol.87

愛仁会リハビリテーション病院
三島圏域地域リハビリテーション
地域支援センター
● 住所：高槻市白梅町5番7号
● 電話：072-683-1212
● URL：http://aijinkai.or.jp

1面 地域交流スペース「愛仁会ふれあい広場」にて講演会を開催
2面 通院リハビリの紹介 ／ (連載)チーム医療活動のご紹介⑦ 車いす検討会
3面 地域クリニックとの連携の中で㉑
4面 患者さまだより㉑ ／ 在宅サービスセンターだより

地域交流スペース「愛仁会ふれあい広場」にて 講演会を開催

地域医療部 退院支援看護師 中村 利都子

平成30年4月から愛仁会リハビリテーション病院3階に地域交流スペース愛仁会ふれあい広場が開設されました。ここでは、法人各施設の研修会、高槻市長寿介護課・地域包括支援センター事業、地域住民（患者様含む）が主体となって行う事業等の開催を行い、地域住民同士、あるいは地域の方々と法人職員・地域の医療福祉従事者の交流の場となっています。

法人各施設の研修会として、愛仁会リハビリテーションでは、10月4日に『正しく知ろう骨粗しょう症』、11月1日に『ロコモ深めて実践しよう』というテーマで講演会を開催しました。吉田院長が、骨粗しょう症やロコモティブシンドローム（以下ロコモ）について疾患や予防について話され、その後理学療法士から予防体操について説明し、参加者と一緒に体操を行いました。ロコモとは運動器の障害や衰えによって、歩行困難など要介護になる可能性の高い状態のことをいい、骨粗しょう症はロコモの大きな原因のひとつです。骨粗しょう症・ロコモを予防するために、椅子を利用した膝曲げ運動・かかと上げ運動など、無理のない程度に毎日続けることが大切であるとのことでした。

また、12月13日は『認知症予防』について砂田副院長、12月20日は『認知症との関わり方』について粂田（しときでん）看護師の講演会を開催しました。認知症予防には、難聴やメタボを治し・喫煙をやめ・早足で歩くこと・人と交わること等が大切であること、認知症の方と接する時には、ゆっくり笑顔で話を聞いて、温かく触れながらやさしい声で何度でも話すことが大切だと話されていました。

超高齢社会を迎え、骨粗しょう症・ロコモ・認知症は非常に関心の高い内容で、いずれも地域の方々、入院患者様、ご家族様合わせて50名近く参加していただきました。質疑応答では熱心に質問されており、アンケートでは「大変わかりやすく参考になった」、「退院後も教えてもらった運動をしたい」など好評でした。

1月10日には、介護老人保健施設ケーアイ・しんあいがかるた大会を開催しており、今後も毎月第1木曜日の10時から、愛仁会各施設の講演会等を予定しています。地域の方々の健康ニーズに対応できるような会を開催していきたいと思いますので、是非ご参加ください。

通院リハビリのご紹介

リハ技術部 在宅支援科 十河 翔太

当院では本年度4月より、当院回復期リハビリテーション病棟を退院された患者様を対象に退院後の3ヶ月間、外来での理学療法・作業療法・言語聴覚療法（以下、通院リハビリテーション）を実施しております。

開始から約8ヵ月経過しますが、退院後の生活に不安を感じておられる方や、職場復帰を目指し動作能力の向上を目指す方等、多くの患者様にリハビリを提供させて頂いています。

患者様の入院中から各療法場面に参加し、動作能力や退院後の課題を共有することで、退院後もスムーズに在宅生活へ移行することが可能となります。通院リハビリテーションを利用された患者様からも、「退院後も続けることができるということが安心」、「何度もお会いしたスタッフなので話しやすい」といったお声を頂いています。

退院後も在宅生活に不安を持っておられる患者様に対し、在宅での生活状況を確認しながら、患者様一人一人に必要なリハビリを提供させて頂くことで、退院後の生活をより豊かにするお手伝いができると考えております。

通院リハビリテーションをご希望の方は、主治医へご相談ください。

（連載）チーム医療活動のご紹介 ①

車いす検討会

リハ技術部 教育研修科 白井 宏樹

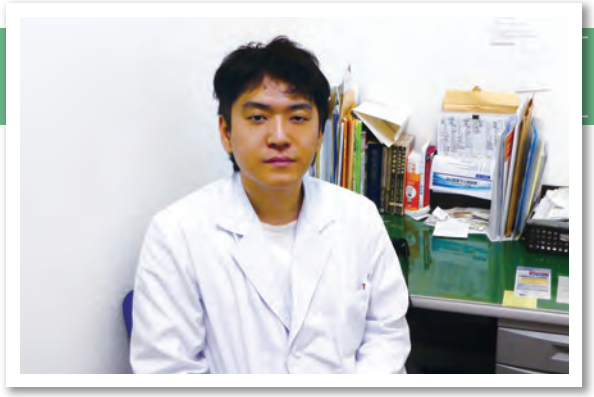
座位や歩行が困難な方にとって車いすは生活に欠かせません。身体に合っていない車いすに座っていると前すべりや身体が傾くなど姿勢が崩れ、痛みや変形の原因となります。そのため、適合した車いすを使用することは生活を送る上で重要なのですが、車いすの選定や調整には身体のみならず様々な状況を考慮し、幅広い視点で検討する必要があるために簡単なことではありません。

そこで、当院では入院患者様に医師、理学療法士、作業療法士、車いす業者、放射線技師といった多職種で協働して車いすを検討する“車いす検討会”を行っています。車いす検討会では座位の評価や使用している車いすの確認を行うとともに、座圧センサーという機器を使用することでお尻にかかる圧力を測定しています。局所に圧が集中していないか、痛みや床ずれが生じる危険性がないかを客観的に確認しています。これらの評価結果をもとに各職種がそれぞれの専門性を活かして意見を出し合うことで、より患者さまに適した車いすを提供できるよう取り組んでいます。

▲写真：車いす2人の内右側は患者様、左側は車いす業者です。

このような車いすの提供を通して、患者様の床ずれや変形等を予防し、移乗や食事、駆動などの動作がより行いやすくなることを目指して今後も活動していきます。

地域クリニックとの連携の中で Vol.21



▲立花宏一院長

たちばなクリニック

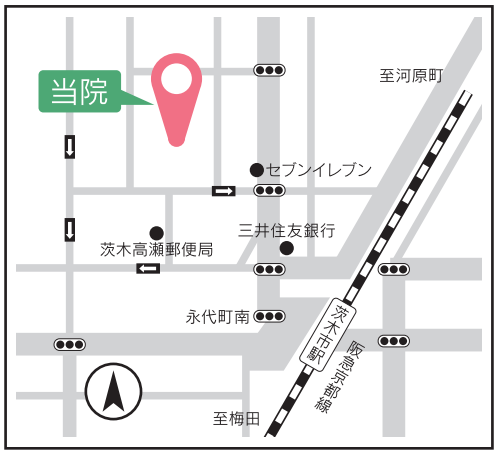
内科

〒567-0810 茨木市宮元町2-13

TEL072-624-4572

診療時間	月	火	水	木	金	土
13:00~16:00	○	—	○	—	○	—

【休診日】火・木・土・日・祝　予約制



＊阪急京都線「茨木市駅」徒歩5分

たちばなクリニック 立花宏一院長に
インタビューさせて頂きました。

Q 開業されたきっかけを教えて下さい

A 勤務医時代、退院したくても在宅で診療してもらえる医療機関がなく、退院できない患者さんがおられました。病気になっても「家へ帰りたい」という思いを持つ患者さんの受け皿になることができればと思い開業を目指しました。

Q クリニックの特徴を教えて下さい

A 患者さんのご自宅に伺い診察する訪問診療をメインにしており、医師2名で対応しています。訪問範囲は茨木市、摂津市、高槻市西部です。脳血管疾患後遺症、進行した認知症、がんなどで在宅療養を希望される方で、通院困難な患者さんのご自宅に伺い、診察させて頂いています。訪問させて頂く患者さんは点滴や胃ろう、在宅酸素、人工呼吸器など様々な状態の方がおられます。ご自宅で介護負担の大きな患者さん、ご家族のお困りごとやご意向を伺い、ケアマネジャーや訪問看護師などと連携し、医療の面から在宅生活を支えるお手伝いをさせて頂いています。

ご自宅で療養されたいが、病院へ通院が難しいという方はご相談下さい。

立花院長ありがとうございました。クリニックには訪問診療専用の車があり、1日8名程の患者様の訪問に行かれているとのことです。ご自宅で療養される患者様にとって、先生の存在はとても頼もしいのではないでしょうか。

愛仁会リハビリテーション病院を退院される患者様にも通院が難しい方がおられるので、訪問診療等様々な場面でお世話になります。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

INTERVIEW
患者さまだより㉑ インタビュー

地域医療部 黒岩 克美

Sさんは65歳の女性、今年1月にくも膜下出血を発症され緊急治療を受けた後、当院へリハビリ目的に4月から8月まで入院されました。

口からの食事が困難なため胃ろうを作られ、痰が多いこともあり気管切開の状態で、ご主人様の介護を受けながら生活されています。

退院して3か月半経過されたので、どのように生活されているのか様子を伺いにご自宅に訪問させて頂き、ご主人様からお話を伺いました。

Q 現在はどのような生活を送られていますか？

【A】週3回のデイサービスと週2回の訪問看護、週1回の訪問リハビリのサービスを利用しながら、3か月経ってやっと生活に慣れてきたという感じです。

たまに近くの公園まで2人で散歩に行きます。週2回短い時間ですが、仕事にも行っています（ご主人様）。

Q リハビリテーション病院での入院はいかがでしたか

【A】本人がそういう仕事（看護師）をしていたので、大変な仕事をしていたんだなと感じました。リハビリして頂いたおかげでここまで回復したので、絶対に必要なプロセスだったと感じています。家に帰ろうと覚悟できたのもリハビリ病院のおかげです。

Q これからの生活の目標は？

【A】最終目標は杖をついてでも一緒に歩くことが出来るようになることと、話が出来るようになることです。本人の母親が101歳で九州におりますので、母親に会いに行くことも目標ですね。

Sさん、ご主人様、今後も頑張りすぎない在宅生活を続けていきましょう。お忙しい中時間を頂きありがとうございました。

愛仁会高槻 在宅サービスセンターだより

「いつまでも台所に立ちたい」思いを支援して

ヘルパーステーション愛仁会高槻 介護福祉士 宇野 優子

今回はデイサービス・ヘルパーを利用しながら在宅生活を送っておられる80代女性を紹介します。

元々料理好きで冷蔵庫にある食材を使って、てきぱきと料理されていました。40代の時に慢性関節リウマチと診断されてからも、なんとかご主人様の手を借りて料理することを続けておられましたが、症状が進行するにつれ段々と難しくなり、ヘルパーと一緒に行うことになりました。

『台所に立って味付けをしたい、できることは自分で行いたい』という思いが強く、以前利用していた訪問リハビリで、作業療法士に立位の保てる時間や痛みの出ない身体の動かし方等の指導を受けて、少しでも希望に対応できるようにしました。希望の味付けをされる時に、調味料の瓶が重く一人で持つことが難しい為、ヘルパーが瓶を持つことを支える等の補助を行うようにしました。ヘルパーと一緒に毎回違ったメニューで料理できる事が増え「主人に色んなメニューを食べてもらえて嬉しいわ」と話されるようになりました。これからも大好きな料理を続けられるように支援していきたいと思います。

ヘルパーステーションは、在宅生活の中で、自分の好きなことを続けたいという思いをくみ取って、ご本人の望む生活に少しでも近付けることができる様、他職種との連携を図ることを大切にしながら、支援できるようにしていきたいと思います。